

2006年5月30日

## 「第18回世界青年の船」寄港地活動のご紹介

関西地区 小林 史陽

はじめに：「世界青年の船」は航行距離が長いので、船上生活が長く寄港地の活動時間は非常に限られています。その中に様々な活動が盛り込まれているため、非常にスケジュールがタイトで、いつも時間に追われているような状態でした。それでも、インド、ケニア、モーリシャス、シンガポールのいずれの国にも行ったことがなかったこともあり、どの国もとても印象に残っています。

### 1. インド：チェンナイ（1月30日～1月31日）

National Institute of Youth Development を訪問し、コースディスカッションごとに分かれ、現地の青年との議論を行いました。また、現地の村を訪れ、NPO団体や小学校の視察を行いました。特に、小学校の生徒は貧しく、彼らのために何かをしたいとこの寄港地活動の直後からユニセフの募金活動を始めました（募金活動の詳細は、<http://www.zepher.dyndns.org/fk/swy/jp/> を参照してください）。



写真：インドの伝統芸能



写真：チェンナイの町の様子（フリータイムに撮影）

寄港地に滞在中もびっしりとスケジュールが組まれており、フリータイムはスズメの涙ほどしかありません。特にチェンナイはひどく1時間あまりのフリータイムでした。しかし、おのおの自由に活動できるフリータイムはとても貴重でした。当日の日記からその様子をご紹介します。

Jan 31<sup>st</sup>. Free-time. Only one-hour, but still very interesting. Walking around very dusty and crowded street. First I bought sandals at a footwear shop, because it had been too hot with shoes on Indian Ocean that I had needed them urgently. It cost 300 Rupees. 420 Rupees = 10 dollars. About 800 Yen. Kind of expensive for a pair in a developing country. I got a small bottle of coke. It cost 7 Rupees. About 20 yen. Reasonable in such a country. Then precious one hour passed.

### 2. ケニア：モンバサ（2月7日～2月9日）

Training School for disable girl（障害のある少女たちの学校）を訪問し、現地の教育の様子を視察しました。少女たちは学校で裁縫やビーズでの小物作りを学んでいました。視察の最後に、少女たちが”We don’t need sympathy, but opportunities!”（訳：同情はいらない、機会を与えて欲しい）という詩を力強く朗読していた姿が印象に残っています。彼女たちが日本の童謡「海」（海は広いな、大きいな…行ってみないな、よその国…）を唱歌してくれたことも忘れられません。子供の頃自分がこの歌を歌っていたことを思い出したことと、この歌詞のとおりまさに大きな海インド洋を超え、はるかアフリカ大陸でこの歌を聞くことがとても感慨深かった

のだと思います。



写真：ケニアでの歓迎ダンス



写真：Haller Park のキリン

また、Haller Eco-Park を訪問し、エコシステム回復プロジェクトを見学しました。この公園の周辺は、20世紀当初セメントの材料を採掘し、その結果土地が大変荒れてしまいました。その土地に草木を植え、動物を放し、エコシステムの回復を図るというプロジェクトでした。写真にあるキリンもその活動の一環として放されたそうです。

### 3. モーリシャス：ポートルイス（2月13日～2月14日）

市街地にてモーリシャス警察先導によるピースマーチを行いました。



写真：ピースマーチ（ポートルイス）



また、モーリシャスの主産業である砂糖の博物館を見学しました。モーリシャスでは15種類の砂糖を作っており、それらの味比べをしたことが印象に残っています。15種類のうち2種類は、輸出をせずモーリシャスのみで販売をしているそうです。最後の水分を飛ばす過程の温度によって砂糖の色が変わります。茶色が濃くなればなるほど、温度が高いそうです。

他に、国連グループは、UNDP（国連開発計画）が資金援助しているフリースクールを見学しました。モーリシャスでは高校までの12年間は義務教育にも関わらず、30%の子供が高校には行かないそうです。そんな子供たちに、自立して生きていく術を教える学校です。生徒たちは教育の一環として、銀行での口座の作り方やお金の引き出し方など、社会生活を送る上で必須で、きわめて実践的なことも学んでいました。

各寄港地でレセプションパーティが催されます。我々の寄港地活動は現地の多くの関係者の協力によって実現されています。その協力に敬意を表し、彼らを日本丸の船上パーティに招待するという公式行事です。公式パーティですので正装です。ホストとして招待者を退屈させないよう、多くの人と話すよう心がけました。招

待者は参加青年の家族、青年省の官僚、実業家（日本と何らかの関係のあるビジネスを営む）、警察関係者（警備に当たる）の多岐に渡り、多くの青年が新しい出会いを楽しんでいました。



写真：招待者と筆者（右）／レセプションの様子

#### 4. シンガポール（1月26日、2月22日）

給油のために、往路と復路で一度ずつシンガポールに寄港します。給油のためだけに寄港しているため、寄港地活動はありません。給油に必要な間は、フリータイムとなります。シンガポールのフリータイムがすべての寄港地のそれの中で、もっとも長いくらいです。長いといっても、数時間程度です。おもしろかったのは、カナダのデレゲーションと一緒にいました（1月26日）が、彼らがぼろぼらになっていく過程です。時間が短いうえ、各個人のニーズが違うため、わかれわかれになるのは分かるのですが、彼らはそれが当たり前のように気ままに行動している姿が印象に残っています。日本では受け入れられにくい気ままさ（個人行動）かなと思いました。結局、最後はファリーンと二人になり、マーライオン（大）やイスラムのモスク（ファリーンがイスラム教徒で、彼女の希望により）などを見学しました。



写真：日本丸 in Singapore



写真：マーライオン（大）



写真：モスク

**最後に：**寄港地活動のある国（シンガポールを除く国）では、それぞれの国が精一杯我々を歓迎してくれたと感じています。今回は歓迎を受ける側でしたが、逆に日本が受入れ側になった際は、我々も精一杯の歓迎をお返ししたいと考えています。たとえば、私は大阪府に住んでいますので、大阪IYEOが外国青年を招く際には、彼らを気持ちよく迎えたいと思っています。そして、その受入れが日本の国際交流または、友好的国際関係の構築の一助になればと考えています。

以上